



みみタロウ

日本語版 2024年4月 ☆151号

いつも人生に夢中です！

今回みみタロウは、数学者のセルジュ モーマリーさんと石塚純子さんご夫妻にお話を伺いました。



セルジュさん：私 が 生ま れた のは 1938年。戦 時 下 の スイ ス で 幼 少 期 を 過 ぎ っ せ ました。ス イ ス は 第 二

次世界大戦に参戦こそしなかったものの、ドイツの脅威にさらされ、市民総出で国を守っていました。我が家でも父は国境の警備に赴き、週に一度銃をかついで帰ってきました。子どもの遊びも戦争ごっこばかりで、「ドイツ人や日本人は悪魔だ」と言っていました。そんな中、母はフライパンを片手にいつも歌いながら料理をしていたことを思い出します。

スイスは多民族国家で、国内では4つの言語が使われ、学校ではフランス語とドイツ語を学びます。当時、中学を卒業すると、進学を目指す生徒だけが高校に入学し、ほとんどの生徒は職業高校に行くか就職していました。私も15歳から朝7時から夜遅くまで機械工場で働いていました。ですがどういつか数学に興味を持つようになり、仕事の後、ソルボンヌ大学の数学の本を買って一人で3年ほど勉強を続けました。その内大学で学びたい気持ちが抑えきれず、高校受験に不合格なら工場に戻る約束で工場長に休暇をもらいました。予備校に1年通い、19歳で高校に合格。奨学金を利用して1年で卒業すると、念願の大学に入学しました。

大学では勉強以外に様々な課外活動があり、私は山岳スキーや漕艇に明け暮れ、音学学校でクラリネットも学び始めました。学生連合会にも入会し、ジョッキ15杯のビールを飲みほすという洗礼も受け、自覚めたら大聖堂の階段だったというアクシデントもありましたが。。。

1968年に博士課程を終了後、ヨーロッパやアメリカの数学研究機関で研究を続け、35歳で母校のローザンヌ大学の教授になりました。そして1990年、アジア数学国際会議のために京都に滞在中、立ち寄ったうどん屋で、職場の同僚と昼食に来ていた妻との出会いがありました。2年後に結婚。ローザンヌで暮す中、娘のあずさが生まれ、今、東京でバレリーナをしています。そして17年前、退官を機に来日。京大数理解析研究所に招待研究者として勤務し、コロナ禍後は家でリモートワークをしています。

私の日課は、6時に起床。午前と夜にパソコンに向かって仕事をし、夕方にはマンションの集会室でクラリネットの練習をします。そして週に3回早朝に、瀬田川でボートを漕いでいます。月曜は、そこから自転車で日本語教室に向かい、先生との会話を楽しんでいます。日本語は家の中だけでは上達しないので、教室があるのは有り難いですね。また、大津ジャズフェスティバルや五重奏団にクラリネットに参加させていただくこともあります。出かけていって人と出会うのが海外で生きるコツ。そして何より、今の幸せは、数学の事以外、全てで世話をかけている妻のおかげです。

純子さん：日本に来ることは夫にとって大変な決断だったと思いますが、私のわがママを聞いてもらい、とても感謝しています。夫にはこれまで通りに過ごしてほしいという気持ちから、故郷のレマン湖を彷彿させる琵琶湖も、ボートのできる瀬田川もある大津に住むことにしました。国も異なり28歳の年齢差もある元々とても違う私たちです。無理に相手の全てを理解しようとせず、自分の文化を押しつけないことで、仲良く暮しているように思います。少し距離をとって異なることを受け入れ、お互いを尊重することが大切。健康に気を付けながら、いつまでも楽しく暮しましょうね。